

日本のポンペイ

～ 渋川市の遺跡を探る ～

No.4

『金井東裏遺跡の甲を着た人物発見の衝撃』

金井東裏遺跡は、榛名山北東

麓の吾妻川南岸の段丘上にあり、

1520年前の火砕流で被災し

たムラ・畠墓などが調査されま

した。その中で一番の発見は、

甲を着たままの40代の男性の人

骨でした。これは日本ではもち

ろん初めてで、世界的にもイタ

リアのポンペイ遺跡などの遺体

群の検出に匹敵する大発見でし

た。甲を着た人物以外にも、30

代女性、5歳児、乳幼児などが出土し、さらに、南の金井

下新田遺跡からは10代の人物が2体発見され、計6体もの

人骨が出土しています。

通常、古代以前の人骨は、保存状況が良い墓などから出土することがありますが、日本の土壌は酸性で、火山性土は特に酸性が強く、人骨は腐朽して極めて残りづらいのです。火砕流に埋もれた古墳時代のムラから発見されるとは、誰も想像していませんでした。金井東裏遺跡で人骨が遺存した要因は、火山灰・火砕流の土の性質の違いにより、濃い密度の土と薄い密度の土が互い違いに積み重なったことです。その結果、浸透圧の関係で土の間にキャピラリーバリアと呼ばれる現象が起きて、下部に水が流れず、乾燥したのです。古代エジプトのミイラが乾燥した気候により残ったように、結果として状態の良い人骨が残り残りました。金井東裏遺跡の人骨は、偶然の自然の作用により、現代の我々に多くの貴重な情報を与えてくれたのです。

（群馬県埋蔵文化財調査事業団 杉山 秀宏）

○このコーナーでは、榛名山噴火に関連する市内の遺跡について紹介しています（毎月15日号掲載）。